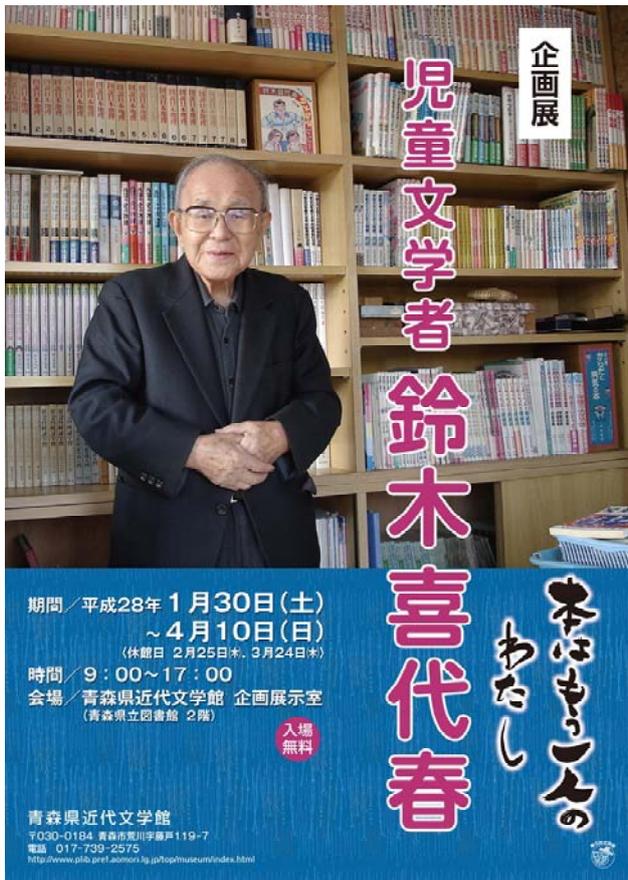


県立図書館だより

平成28年2月

青森県立図書館報 第24号

企画展 本はもう一人のわたし 児童文学者・鈴木喜代春



近代文学館では、鈴木喜代春^{きよはる}の業績と作品の魅力を紹介する企画展「本はもう一人のわたし——児童文学者・鈴木喜代春」を開催しています(4月10日(日)まで)。

大正14(1925)年 青森県南津軽郡田舎館村に生まれた鈴木喜代春は、学校現場で小・中学生の教育に情熱を傾けた教育者であるとともに、『十三湖のぼば』をはじめとする児童文学作品を数多く発表した青森県を代表する児童文学者です。昭和62(1987)年発表の『津軽の山歌物語』では、第12回日本児童文芸家協会賞を受賞しています。

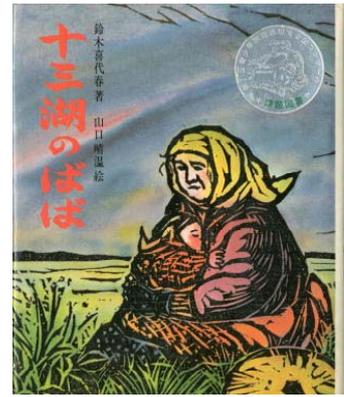
本号2ページ及び7ページで、本展について詳しく御紹介します。

目次

企画展「本はもう一人のわたし——児童文学者・鈴木喜代春」	1～2
利用者カードが新しくなりました	2
参考・郷土室からのお知らせ!	3～4
こどものひろば	5
ご存じですか?この資料	6
ようこそ文学館へ!	7
カウンターからひとこと	8

きよはる むちやくせいきょう
鈴木喜代春は、無着成 恭の『山びこ学校』（昭和26年）と並び称せられた黒石小学校四年生の生活記録『みつばちの子』（昭和27年）によって日本の生活綴方教育史に大きな足跡を残し、戦後の新教科・社会科において「社会科検証学習」を打ち立て、全国に知られた教育実践者でした。

喜代春は、学習内容が知識ばかりになり、生身の「人間」の存在が見えなくなるのを克服しようと、学級文集に自作の物語を載せて教材としました。これが後に『北風の子』（昭和37年）、『白い河』（昭和44年）、『十三湖のばば』（昭和49年）等の作品として刊行されることになります。



高度経済成長時代に突入して効率優先の価値観が蔓延すると、学校では偏差値を絶対視し、落ちこぼれや、自殺する子どもまで出るようになりました。この風潮を嘆いた喜代春は、「学校の主人公は子ども」の信念のもと「ダメな子シリーズ」をはじめとする「学校もの」を書き始めます。こうして刊行された喜代春の著書は、実に200冊にもものぼります。

企画展では、戦後70年間にわたって教育に「人間」を取り戻そうと奮闘し、信念をもって書き続けた鈴木喜代春の業績と作品の魅力を紹介しています。

◇企画展関連行事のお知らせ ※申込不要(無料)

●企画展協賛展示「本を読んでキラキラ～きよはる先生からのメッセージ」

日時・場所：1月29日(金)～4月27日(水)・県立図書館1階児童閲覧室

●日曜講座「鈴木喜代春・児童文学への思い」

日時・場所：3月6日(日)14:00～15:00・県立図書館4階研修室

講師：伊藤文一〈青森県近代文学館総括主幹〉

●日曜午後の朗読会(鈴木喜代春「白い河」)

日時・場所：4月10日(日)13:30～14:00・近代文学館企画展示室前ロビー

朗読：青森県近代文学館解説員

【お知らせ】利用者カードが新しくなりました

平成27年12月に当館の利用者カードをリニューアルしました。お一人につき1枚のカードを長くお使いいただけるよう、以下の点を変更しました。

○変更した点

- ・児童用・一般用の区分がなくなりました。
- ・「発行年月日」と「有効期限」の記入欄がなくなりました。

これまでどおり、3年ごとに更新手続きを行います。カードは継続してお使いいただけます。更新手続きが必要なときは、貸出の際などに職員がお知らせします。



【地色は淡いピンク色に変わりました】

参考・郷土室からのおしらせ！ 故郷（ふるさと）の話題読み語り 「雪の殿様！かんじきにはしゃぐ」



二十四節気の「大寒」から「立春」は、一年のうちで最も寒い時期と言われます。

青森市の過去 30 年間の平均（気象庁HP公開「過去の気象データ：平年値<日ごとの値>」）を見ても、最低気温、降雪の深さは、この間にピークとなっています。

（※積雪のピークは立春のあと、2月の中～下旬です。）



この冬は、エルニーニョ現象によって暖冬の前報でした。しかし、青森の雪は降り出したらあっという間に 20～30cm となり、連日の雪かきに、雪の降らない地方が羨ましいなと思った方もいるのではないのでしょうか。

雪国の暮らしは、暖かい地方に比べ何倍も大変だと感じつつも、「古詩十九首」の一節「胡馬依北風。越鳥巢南枝」（北から来た馬は、北風に身をまかせ、南から来た鳥は、南向きの枝に巣をつくる。）を挙げ、故郷の忘れがたきは世界の人情なりと、生まれ育った地域の雪や雪国の暮らし、風物を克明に記録

し、伝えようとした名著『北越雪譜』（写真上：当館蔵）があります。

著者の鈴木牧之（ぼくし）は、江戸時代、越後国魚沼郡塩沢（現在：新潟県南魚沼市）の商人です。幼い頃から「経書」「詩」「絵」を学んだ牧之の文章と絵は、単なる記録に留まらず、読み物として強く惹き付ける魅力があります。雪の結晶の図、カンジキなどの雪上歩行具から雪男？異獣（いじゅう）の話まで、話題の豊富さと、何よりも牧之の類稀な観察力に驚かされる 1 冊です。

現在の言葉に訳された本も出版されています。是非一度、ご覧ください。

さて、今回のご質問は、“雪”と“かんじき”についてです。

【質問】

大浦（津軽）為信が大光寺攻めをした際に、深雪のなか大浦勢が“カンジキ”を履いていたことで大勝したと、本で読みました。当時の様子を伝え、書かれた史料はありますか？

為信の兵がカンジキを履いて大光寺攻めに勝利したのは、天正 3（1575）年とされています。（『津軽一統志』他。『永禄日記』では天正 4 年。）現在の暦で言えば 2 月 11 日（天正 3 年 1 月 1 日）、まだまだ寒さ厳しく、積雪が最も多い時期でした。

大光寺攻めのカンジキについては、『津軽為信』（成田末五郎著 東奥日報 1975）をはじめ、多くの書籍やインターネットで紹介されていますので、ご存知の方も多いかもかもしれません。

当時（為信の時代に）、その時の様子を書いた文書類は、残念ながらありません。

『永禄日記』や『津軽一統志』などは、時代はかなり経ってからになりますが、藩政時代に書かれ、編纂された文書、或いはそれらを基に明治初頭、旧藩士などが編纂した記録です。

では、戦いの様子がどのように伝え、書かれているのか、史料を覗いてみましょう。

「～大浦方は、思う儘（まま）に敵を深雪の中へ誘引（おひき）入能（よ）き時分ぞと取って返ししころ（「革」偏に、旁は「周」）をかたむけ突かゝる大光寺には深き雪の上にて懸引（かけひき）自在ならざる所を、櫓（かんじき：前文にルビ）

はきたる大浦勢雪の上をさらさらと走り廻りて散々に突立ければ、泥に酔たる魚を手取にするに異ならず ~」

(『津軽一統志』青森県叢書第六編 青森県立図書館・青森県叢書刊行会 1953 より)

「雪の上をさらさらと走り廻り」とは、なんとも芝居がかった表現ですが、『津軽藩旧記傳類』では更に「雪の上をさらさらと平地の如く走り廻り」となっていますし、「しころをかたむけ突かゝる」が「三間柄の鏑(やり)を以って突かゝる」となっています。

このまま講談の台詞にでもなりそうです。

「講釈師見てきたような嘘をつき」ではありませんが、藩祖の武勲ですから、言い伝えや後年の書き物には少しずつ脚色が加わっているのでしょう。

※ 「しころ」は、兜(かぶと)の下部に付いている首から襟を防御する札(さね)や帯状の鉄板のこと。『津軽一統志』では「革」偏に、旁は「周」と書かれていますが、「鏑」「鋳」などの漢字が用いられます。(参考:『日本国語大辞典 第二版 第6巻』小学館 2001)

さてここで、一つの疑問が湧きませんか？

この大光寺攻めは、晦日を元日として祝い、敵の大晦日の祝儀の最中に打寄せ、一潰しにしてやろうという為信の奇襲作戦でした。確かに、晦日祝儀の後の旧暦正月元辰刻(午前8時頃)は不意打ちであったかも知れません。しかしそこは雪国の戦人(いくさびと)、雪上の戦にカンジキを履かずに応戦したのでしょうか。それとも、カンジキを持っていなかったのでしょうか。

この前年の夏、為信は一度大光寺攻めに失敗しています。

何と、湿田に馬を乗り入れ鞍まで泥に浸かってしまい、漸く馬を立直すも、勝負を決せず引き分けに終わっていました。

それから4カ月、為信は考えに考え抜いたのでしょう。

12月となって登城を命じた諸将に向かって、「此度予が少し考える処有之、此の雪の中を自由に歩行致すべきものは、如何なるもの能きや……。公俗にカンジキと申すものは如何なるものぞ。」また、「雪船とは、如何なるものぞ。」と尋ねます。庶民の間ではカンジキが使用されていたのですが、武士が履くこと、ましてや戦に使用することなどなかったのでしょうか。大光寺勢も当然、使っていなかったと考えられます。



家臣が成る程と、絵を書いて説明すると、早速、為信はカンジキと雪船(四角い箱状のものがついたソリ)を持参させます。使い方を聞くと、為信は「成程、妙器である。予が之を稽古いたして見せる。」と言って、自ら毎日毎夜に雪の中で稽古します。上達すると、家中の者も一緒に稽古させ、喜んだといひます。

為信と言えば写真(写真左;津軽為信木像 長勝寺所蔵)のとおり、いかつい髭のお殿様。

戦のためとはいえ、髭面の殿様が自らカンジキを履き、慣れないうちは幾度となく転び、雪まみれになったに違いありません。どんな表情だったのは分かりませんが、家中の者たちと一緒に、喜びながら稽古に励んだというのですから、たいそう気に入り、子どもの雪遊びのようにはしゃいでいたのではないのでしょうか。

以上は、『新岡累代日記』(みちのく双書 第32集 青森県文化財保護協会 1972)に記述があります。

さて、為信が履いた「カンジキ」とは、どのような形状だったのか、また、その他参考文献についても書き記したかったのですが、紙面の都合上書ききれませんでした。

「カンジキ」の形状、その他参考資料の詳細については、下記までお問合せください。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こどものひろば



『おおきなかぶ』と佐藤忠良さん

ちゅうりょう



みんながよく知る福音館の絵本『おおきなかぶ』は、ロシアに伝わる昔話です。柿本幸造さんや田島征三さんなど、多くの絵本作家さんによって描かれています。やはり『おおきなかぶ』とって多くの人がまず心に思い浮かべるのは、佐藤忠良さんの絵でしょう。

図書館のお隣、県総合社会教育センターにある「インフォメーションプラザありす」に、忠良さんの作品が飾られているのをご存じでしょうか？その作品は、「ミー

マア」という女性をモデルにした彫刻作品です。

「あれ？佐藤忠良さんって、彫刻家なの？『おおきなかぶ』の人じゃないの？」と思われた方も多いのではないのでしょうか。忠良さんは、宮城県出身。幼い頃から画家を目指していましたが、やがて彫刻に惹かれ、彫刻家として活動するようになります。その後、日本人で初めてパリのロダン美術館で個展を開くなど、その作品は日本のみならず、世界で高く評価されています。東京国立近代美術館に収蔵されている「帽子・夏」(1945)を始めとする「帽子シリーズ」は代表作の一つです。



彫刻家として活動しつつ、絵本の世界に足を踏み入れたのは昭和17(1942)年のこと。北海道出身の詩人、吉田一穂さんと組んで刊行した『ウシヲカフムラ』(金井信井堂)が初めての絵本でした。

その後、福音館書店の編集者であった松居直さんとの出会いをきっかけに、『おおきなかぶ』の絵を手がけることになります。

彫刻家としての自身を「職人」と称しながらも、子ども達の教育にも力を注いでいた忠良さんは、当時、子ども達に見せるための、ふんわりと甘やかな「童画」が主流だった絵本に対し、松居さんの「本当にデッサン風な、写実的な絵を子ども達に見せたい」という熱意に応え、自身のシベリア抑留の経験も生かして『おおきなかぶ』を描いたそうです。『おおきなかぶ』は、ご本人曰く「すごく横長の本で、描きにくかった」とのことですが、内田さんのリズム感あふれる語りと、生き生きとした登場人物（改めて見ると、おじいさんの動きはかなりファンキー！）に会いたくて、何度も開きたくなる絵本なのではないのでしょうか。よく見るとネズミは、カブを引っばる時もネコの方を向いていません。「ネコとネズミがあんまり仲良くしてちゃ、子どもだってどこか不自然に思うはず」という忠良さんの考えからなんです。是非、お子さんと確認してみてくださいね。

さて、「インフォメーションプラザありす」は、県民カレッジ／子どもカレッジの事務局になっており、2016年1月から、図書館の本を読むと1単位がもらえる取り組みも始まりました。これを機会に、『おおきなかぶ』の作者、佐藤忠良さんの彫刻家としての作品にも触れてみませんか。

『おおきなかぶ』(A・トルストイ/再話 内田莉沙子/著 佐藤忠良/画 福音館書店) 初版1962年



かぶを「引っばる」ように描こうとしても、なんだか「押している」ように見えるため、アトリエの鏡でポーズをとりながら、三回も描き直したという忠良さん。しかし、ご本人曰く、できあがった後も、「悪いんだけど、押してるように少し見える」のですって。そんな忠良さんの心を知ってか知らずか、ネット上では、「かぶがぬけなかった原因」について発見(!)している人たちが…。ヒントは、「おじいさん、足、あし〜!」。次にお読みになる時は、おじいさんの足に注目ですよ。

※特大絵本もあります。



平成 28(2016)年 3 月 26 日、いよいよ北海道新幹線(新青森～新函館北斗間)が開業します。

かつては「本州と北海道とを結ぶ大動脈」と呼ばれ、明治 41(1908)年 3 月から昭和 63(1988)年 3 月までの 80 年間に渡って多くの人や物の行き来を支え続けてきた青函連絡船が、その使命を青函トンネルに譲り渡してから今年で 28 年となります。

今では、津軽海峡の荒波を渡る青函連絡船の勇姿を目にしたことのない方も多いのではないのでしょうか。

当時使用されていた客船・八甲田丸は、現在も青森駅北側の旧棧橋に係留され、内部を見学することが可能ですが、青函連絡船の運航当時の様子を知る手がかりはそればかりではありません。

今回は、青函連絡船に関する当館所蔵の郷土資料の中から 2 点ご紹介します。

『青函連絡船運航技術要覧』(青函連絡船船長会 1981)

各種性能試験の結果や暴風災害時の天気図など多数の詳細なデータを用いて、青函連絡船の着岸操船法や荒天航法などについて記した、青函航路の運航技術解説書。安全運航・定時運航を旗印に、世界の海でも有数の難所と称された津軽海峡を幾度となく往復した船舶職員達の苦心と研究の跡をうかがい知ることができます。



青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

『長声一発! 青函連絡船の旅路』(鉄道ジャーナル社 2009)

1988 年に制作されたドキュメンタリー作品を DVD 化したもの。

函館港から青森港へと向かう大雪丸を主な舞台に、緊張感みなぎるブリッジや通信室の様子、船内で思い思いにくつろぐ乗客の姿、さらに戦前の青森駅と青森棧橋の航送貨車積込風景や、日本海難史上最大の惨事となった昭和 29(1954)年 9 月の洞爺丸転覆事故など、貴重な映像を多数収録。

今回ご紹介した資料は、いずれも館内でご覧いただくことができます。ご希望の方は当館職員にお問い合わせください。

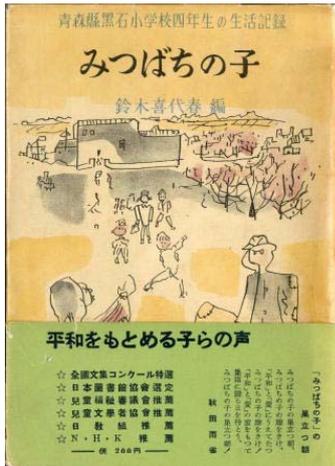
青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様幅広くご利用いただいております。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第23回)

本号1～2ページでも紹介している企画展「本はもう一人のわたし—児童文学者 すずききよはる・鈴木喜代春」(平成28年1月30日(土)～4月10日(日))の資料の中から、2点を紹介します。

鈴木喜代春「みつばちの子」(青森県黒石小学校四年生の生活記録)



鈴木喜代春は、昭和20年9月に青森師範学校を卒業し、終戦の混乱を引きずる学校現場で、民主主義教育の理想を実現しようと奮闘します。試行錯誤の末、子どもたちに自分の生活を事実どおりに書かせ、その作品を集団の中で検討し、現実認識を育てていく「生活綴方(せいかつつづりかた)」という方法にたどり着きます。

丁寧で粘り強い指導により、昭和27年2月、担任する黒石小学校四年五組の学級文集「みつばちの子」が、「全日本小・中学校文集コンクール」で特選に選ばれます。翌月には東洋書館から単行本で『みつばちの子』が出版され、全国から注目されることになりました。

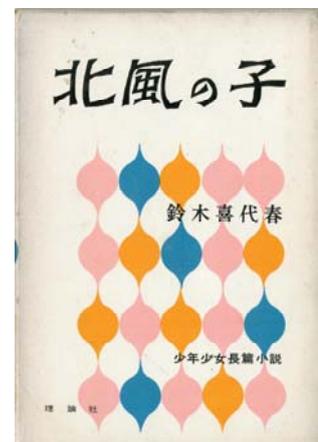
『みつばちの子』
昭和27年 東洋書館刊

この快挙に、黒石出身の文学者・秋田^{うじやく}雨雀からは、「みつばちの/ 巣ばこに/ われは/ 耳あてて/ はるかにもきく/ 春のおとずれ」と書かれた喜びの色紙が送られてきました。子どもたちには、大きな模造紙に書かれたものが送られてきたといいます。

鈴木喜代春『北風の子』

戦後の新教科・社会科の学習を進めていった喜代春は一つの壁に突き当たります。農村に暮らす子どもたちが、自分たちの置かれた厳しい現実を知るにつれ、どんどん希望を失っていったのです。子どもたちに、「人間」が困難な状況下でも理想を抱き、乗り越えていく存在であることを知らせるため、物語「北国の道」を自作し、学級文集に載せて教材としました。

この作品が後に『北風の子』(昭和37)として刊行されることとなります。子どもたちの目に輝きが見えるのを見た喜代春は、その後も「人間のいる教科学習」にするための作品を数多く書き、『北海の道』、『二つの川』、『空を泳ぐコイ』、『飢餓の大地・三本木原』、『十三湖のばば』等へと結実していきました。



『北風の子』
昭和37年 理論社刊

カウンターからひとこと(第23回)



今回は、普段みなさんにお見せできない「書庫」を紹介します。

「書庫」ってどうなっているの？

県立図書館には、約88万点の資料があります(平成27年3月31日現在)。閲覧室(一般、児童、参考・郷土)に置ききれない約71万点(全体の約80%)を2・3階の「書庫」と貴重な本などを保管するための「貴重資料庫」に置いています。

書庫の本棚は2種類あり、閲覧室にあるような固定式のものとボタン一つで開閉できる電動式のものがあります。



←
固定式本棚



→
電動式本棚

書庫の本もお気軽にご利用ください！

人気作家の本を借りようと閲覧室の本棚を探して、「これだけしか本が置いてないのか…」と思った方も多いのではないのでしょうか。

閲覧室の人気作家や話題の本は、予約が入っている、借りられているなどの理由で本棚にないことが多いですが、本棚のスペースに限りがあるため「閲覧室に置いていないだけで、書庫にはある」ということもあります。

お探しの本が見つからないときは、お気軽にカウンター職員にお尋ねください。

プチ情報～レシートの見かた～

館内の情報端末で印刷したレシートは次のようにご覧ください。

①「状態」を確認する

「書架」は貸出できます。「貸出」「予約」は貸出中です。予約を承ります。

②「配架」を確認する

「書庫2」「書庫3」「集密2」「集密3」「貴重」は書庫に置いています。

職員がお持ちしますので、カウンターへレシートをお持ちください。

書誌資料情報		2016/01/24 青森県立図書館 一般目録	
タイトル：祈りの幕が下りる時			
著者名等：東野 圭吾			
出版者：講談社			
所蔵館	配架	取扱	資料番号
請求記号			
青森図	書庫2		10214487371
主配架	913.6	ヒガシノキ	
青森図	B16B		10214398378
主配架	913.6	ヒガシノキ	
			状態
			書架
			貸出

【レシート記載例】

本が2冊あり、閲覧室のものは貸出中ですが、書庫のものは貸出できます。